

リモート空間でニュータイプ？

環境情報学部 教授 おおほりとしお 大堀壽夫

SFCに着任して今年で3年目になる。4月恒例の「ビバースト」では、1年目は緊張とともに挨拶をし、2年目は同僚と会話を楽しんだ。3年目の今年は脇目も振らずビールを飲もうか、などともくろんでいたところに、COVID-19である。授業もリモートとなったが、その中でいくつか気づきがあった。

リモート授業では五感のうち、アクセス可能なのは二つ、視覚と聴覚だけだ。相手の顔も授業資料を表示すると画面の一角で小さく見えるだけになる。もどかしさの中で、言葉が伝わっているのか、自問が続く。

だがそれでも、授業は成立し、毎時間の終了近くに出してもらおうフィードバックには活きのいいコメントが出てくる。時間内ではチャットシステムを通して、素早く間違いを訂正してくれたり、皆で共有する価値のある質問を出してくれたりする。学生にあてる時も、ネット接続ゆえのラグはあるが、PCを離れてよそ見していたのかな？と感じられるラグはない。つまり、学生はみな本気で学んでいるのだ。そして私はそれを実感できる。

話変わって、私の専門は言語学である。インターネットの普及以来、ネット経由のコミュニケーションは盛んに研究されてきた。リモート授業という環境は、新しい一面を見せてくれる。ネット経由で教員と学生の相互的なコミットメントが成立し、それが体感できるのはどのようなプロセスによるのだろうか。システム上のちっぽけなアイコンの点滅や、音声が出るまでの微妙なラグに手がかりがあるのか。五感とは別の第六感が働いているのか。

そのときふと思いついたのが、「機動戦士ガンダム」に登場するニュータイプの概念である。それは宇宙空間の中でより広く深い共感と洞察のできる能力と設定されているが、リモート授業という空間の中で発生しつつある新しい感受性には、これと似たところを感じられる。大学もこれまでの制約を超えて、新しい知識・認識を求める者たちの、時空を超えた「共鳴の場」として変容していくのかもしれない。学びの姿がどうなるか、興味は尽きない。



談	話
室	

教員によるエッセイコーナー